

平成11年度試験研究成果

区分	普及	題名	酒造好適米品種「吟ぎんが」の栽培法
(要約) 酒造好適米品種「吟ぎんが」の栽培法を策定した。 醸造適性を満たし、かつ品質・収量を確保するための籾数は25～28千粒/m ² が適当であり、この時の収量は54～58kg/a(篩目2.1mm調製)となる。そのためには、22株/m ² 程度の栽植株数で、基肥窒素は0.4～0.5kg/aとし、減数分裂期重点に追肥を行う。刈り取り適期は、出穂後の積算平均気温で950～1,100、黄化籾割合で80%程度である。			
キーワード	酒造好適米 ； 吟ぎんが ； 栽培法 農産部 銘柄米開発研究室、水田作研究室		

1. 背景とねらい

「吟ぎんが」は中生の酒造好適米品種で、平成11年2月に奨励品種に採用された。酒造に適した玄米品質で、収量を確保するための栽培法について検討してきた結果、指標となりうる知見が得られたので、普及に供する。

2. 技術の内容

(1) 収量構成要素の指標 (図1～図2)

稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	一穂籾数 (粒)	m ² 当たり籾数 (千粒)	登熟歩合 (%)	2.1mm千粒重 (g)	2.1mm収量(1.9mm収量) (kg/a)
83～90	320～350	75～80	25～28	85～ (75～)*	27	54～58 (58～63)

* : 総籾数に対する2.1mm調製玄米の粒数割合(%)を示す。

(2) 栽培法

ア 施肥法及び栽植密度 (図3～図5)

基 肥	追 肥	栽植密度
窒素成分で0.4～0.5 kg/aとする。	減数分裂期重点とし、窒素成分で0.2kg/a程度とする。	22株/m ² 程度

イ 刈り取り適期 (図6)

出穂後積算平均気温 ()	黄化籾割合 (%)
950～1,100	80程度

3. 普及上の留意事項

- (1) 「吟ぎんが」は一般飯用米に比べ千粒重が大きく、同じ播種重量でも箱当たりの苗本数が少なくなるが、厚播きにすると、苗が徒長し充実度が低下するので、播種量は稚苗の場合乾籾180g/箱程度にとどめる。
- (2) 乾籾180g/箱の播種量で、移植時の苗の掻き取り量をひとめぼれと比較した場合、植え付け本数のバラツキがやや大きくなる傾向があるので、1株5本程度になるように掻き取り量を調節する。
- (3) いもち病の圃場抵抗性は強くないので、適期防除に努める。
- (4) 出穂後積算平均気温が1,100を越えると被害粒が急増する傾向にあるので、刈り遅れにならないよう黄化籾割合80%程度を目安に刈り取る。
- (5) 「吟ぎんが」は、一般飯用米に比べて玄米の粒が大きく心白も多いため、乾燥速度が速く胴割れしやすくなる。このため、生籾の乾燥は一般飯用米の場合よりも送風温度をやや下げで行うこと。また、自然乾燥の場合は適期収納に努める。
- (6) 「吟ぎんが」は粒厚が厚く、高品質米生産のため調製は2.1mmの篩を使用する。
- (7) 栄養診断基準については、現在検討中である。

4. 技術の適応地帯

県中南部の平坦地帯

5. 当該事項に係る試験研究課題

〔水田利用2〕 - 3 - (1) - ア新品種・系統の高品質、安定生産技術の確立

6. 参考文献・資料

- (1) 平成10年度 試験研究成果 品種 酒造好適米「岩南酒13号」
- (2) 平成7、8年度 水稻新品種育成試験成績書 農試県南分場
- (3) 平成9、10年度 試験成績概要書 農業研究センター農産部
- (4) 兵庫の酒米 平成8年3月 兵庫県、兵庫県酒米振興会

7. 試験成績の概要 (具体的数字)

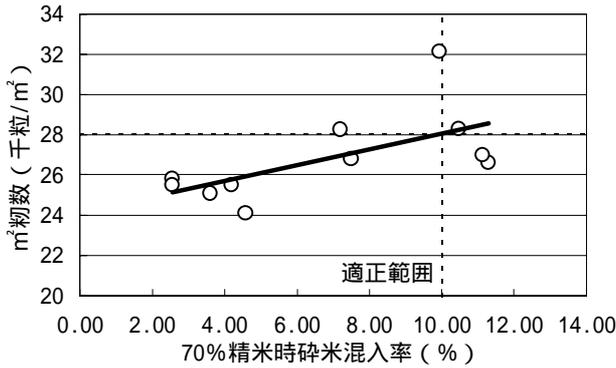


図1 碎米混入率と初数の関係
(平成7～10年県南分場・銘柄米開発研究室、平成10年水田作研究室)
注) 適正範囲：岩手県工業技術センター、斉藤による醸造適性基準

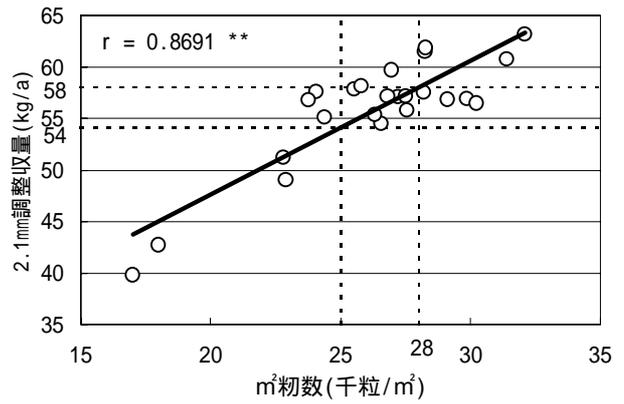


図4 初数と2.1mm調整収量の関係
(平成10～11年銘柄米開発研究室、平成10年水田作研究室、平成11年石鳥谷)

醸造適性の碎米混入率は、 m^2 初数が増えると高まる傾向がある。適正範囲内に収めるためには、 m^2 初数は28千粒/ m^2 以下となる。(図1)

m^2 初数28千粒/ m^2 に対応した篩目2.1mm調整収量は、58kg/aである。また、分布の頻度及び収益性を考慮して、収量の下限値を54kg/aに設定した。収量54kg/aを確保するためには、25千粒/ m^2 以上の初数が必要である。(図2)

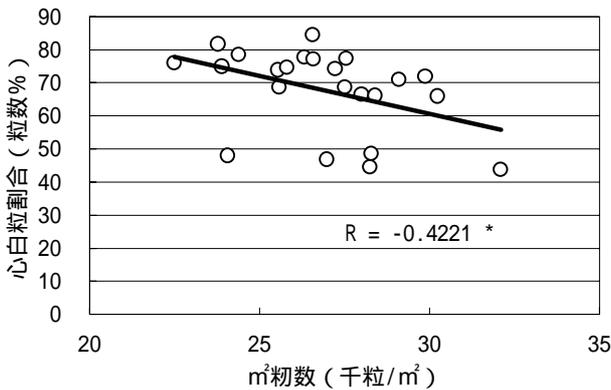


図3 初数と心白粒割合の関係
(平成10～11年銘柄米開発研究室)

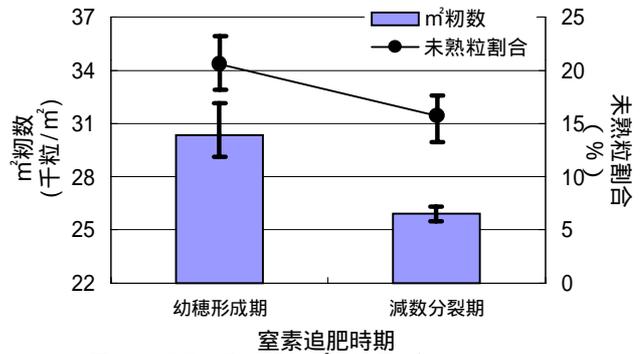


図5 窒素追肥時期と m^2 初数及び未熟粒割合の関係 (平成10～11年銘柄米開発研究室)
注) 施肥窒素量が基肥0.4、0.5、0.7kg/a、追肥0.2kg/aでの比較。Y軸誤差範囲は、データの分布幅を示す。

m^2 初数が多いと心白粒割合は低くなる傾向がある(図3)。幼穂形成期追肥では m^2 初数が多くなり、未熟粒も20%を越える場合がある(図4)。減数分裂期追肥の場合、 m^2 初数は目標値の範囲内にあり、未熟粒も少ない。

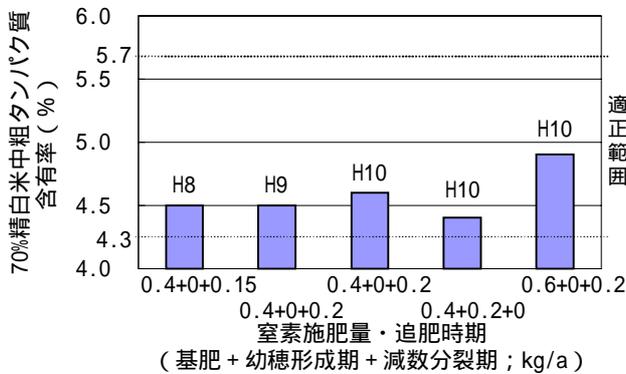


図5 白米中粗タンパク質含有率の窒素施肥量・追肥時期別比較
(平成9～10年銘柄米開発研究室、平成8年江刺現地)
注) 適正範囲：岩手県工業技術センター、斉藤による醸造適性基準

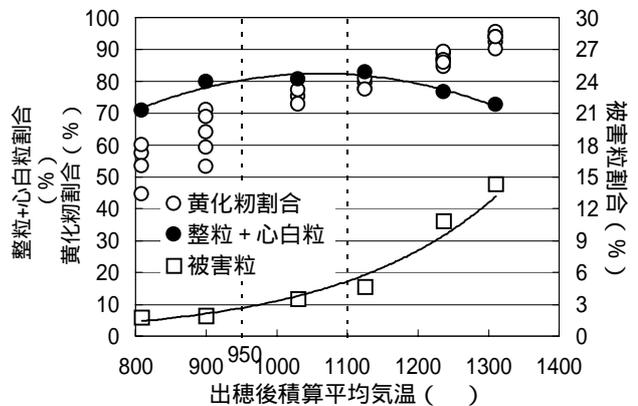


図6 出穂後積算平均気温と整粒+心白粒、被害粒及び黄化粒割合の関係；自然乾燥時
(平成11年銘柄米開発研究室)

減数分裂期追肥でも標肥区(0.4kg/a)では、白米中の粗タンパク質含有率は比較的低く、幼穂形成期追肥区との差も小さい。多肥区(0.6kg/a)では適正範囲内にはあるものの、標肥区に比べると高くなる(図5)。